



『郭公とセロ弾き』(40.9×31.8cm、2015年)

文／角秋勝治 写真／田中良子



ピュアな魂の記録

フレスコ画 有田巧

森を巡り水に潜り、太陽にまみれた幼少の記憶は、誰にもあるだろう。だが成長につれて過去は遠のき、純粋性を放棄してしまうのも事実である。有田巧さんが描くフレスコ画(※1)の連作『少年記』は、子どもであったことを忘れた大人への贈り物といえよう。

作品は故郷の記憶に、幻想的な創造を加味した。登場する少年を作者は、「小学生から思春期一步手前の中学1年」に限り、「ストレートな眩しい生命力」を表した。精神分析学者フロイトも「芸術創造とは、幼時体験を追体験しているようなもの」と述べている。

連作の一つ『森へ帰ろう』は、白馬で戯れる悪戯っ子のピノキオや旅芸人の少年たちと、背後にたむろするトナカイに林が連動して、清々しい自然回帰の情景をうたう。景観を平気で破壊する現代人にとって、自然との交歓はやはり限られた年齢になるのか。

『郭公とセロ弾き』は、宮沢賢治(※2)の『セロ弾きのゴーシュ』を題材にしたもの。いまだ謎に満ちた多面体の表現者である賢治は、有田さんが次に手がける深遠なテーマである。「少年」と「賢治」に共通するのは、失われた至純の心。ピュアな魂の探索は、まだまだ続く。

※1 フレスコ画=13世紀中頃イタリアで確立した壁画の描法。砂と消石灰を混ぜて作った漆喰を壁に塗り、壁が乾かないうちに水で溶いた顔料で描く。

※2 宮沢賢治=1896-1933。岩手県生まれの詩人・童話作家。信仰と農業に根差した創作で絵も描きセロ(チェロ)も弾く多彩な表現者。



ありた・たくみ

1952年、鳥取市生まれ。東京芸術大学大学院修了。88年イタリアに留学、修復家ジュリアーノ・バルディの工房で絵画修復と古典技法を学び、フレスコ画家となる。白日会展で佳作賞、奨励賞、文部大臣奨励賞、内閣総理大臣賞を受賞。現在、白日会常任委員、崇城大学芸術学部教授。



『森へ帰ろう』(181.8×227.2cm、2015年)